

平素は格別のご高配を賜り、厚く御礼申し上げます。  
FMD News Vol.28をお届けいたします。

f facebook



## 2月のTOPICS

### ■ インフルエンザワクチン接種によって引き起こされる 軽度の全身性炎症後と血管内皮機能障害

現在、全国的にインフルエンザが猛威を振るっており、どの診療機関でもインフルエンザワクチン不足が続いている状況です。今回はそのインフルエンザワクチンを用いた全身性炎症後に血管内皮に引き起こされる影響について興味深い報告がございましたのでご紹介します。

8人の健康な男性ボランティア(17歳~30歳)に対しインフルエンザワクチン投与の2日後および14日後に血管内皮機能FMDおよびニトログリセリン誘発性血管拡張反応NMDおよび頸動脈IMTを超音波で評価し、高感度CRP、フィブリノーゲン、環状グアノシンーリン酸(cGMP)、酸化LDL(oxLDL)を各時点で測定した。

インフルエンザワクチン接種は2日目にCRP(from 0.5+/-0.1 at baseline, to 2+/-0.6 mg/L, P = 0.01)およびフィブリノーゲン(from 2.3+/-0.1 to 2.7+/-0.1 g/L, P = 0.01)でわずかな上昇を引き起こしたが14日間で完全に解消した(CRP: 0.6+/-0.2 mg/L, P = 0.9, and fibrinogen: 2.3+/-0.1 g/L, P = 0.8 vs baseline) 酸化LDLは、2日目に(from 1+/-0.1 at baseline to 2+/-0.4, P = 0.04)で有意に上昇し、14日目も上昇したままであった(1.7+/-0.3, P=0.1 vs baseline)。FMDは、2日目(ベースライン時8.3±1.2%、5.4±1%、P = 0.05)に低下し、14日目にはさらに低下していた。(4.9±0.8%、P = 0.03 vs baseline)。NMDおよび頸動脈IMTには、試験期間を通して変化はなかった。

引用文献：Ann Med. 2007;39(5):392-9.

インフルエンザワクチン接種によって引き起こされるわずかな炎症反応後に内皮機能およびLDLの酸化は、少なくとも2週間持続する可能性があることが示唆されました。

すでに臨床研究では、急性炎症性疾患後の心血管リスクの増加が示されており、今回の検証が急性炎症による心血管リスク増加を部分的に解明することに繋がるのではと考えられます。